

有職故実に基づく京雛をつくる  
黄綬褒章受章 現代の名工

# 安藤人形店

安藤人形店（上京区）では、「飾らない普段の製作風景を」との思慮と、あたたかい心遣いでもてなし。有職雛人形司一子相伝の匠の技が、二代安藤桂甫氏から三代目の忠彦氏へ受け継がれ、日々営まれている様子を、見学者はゆつたりとした時間のなかで存分に堪能した。



▲忠彦氏の奥さまから、当家の昔の写真を見せていただく

▶京都の歴史や位、装束についてなど、京都にまつわる興味深い話を拝聴



桂甫氏のあいさつ「人形づくりを66年続けてきました。無から有をつくっていくのが私の仕事です。100年経っても愛されるひな人形をと考えてつくっております」



京都でしか手に入らない大人気のアイスクリームを、との心尽くしをいただき、涼を得ながらの楽しいひととき。またテーブルには、季節感いっぱいのお茶菓子が出された





伊予の古い公文書の手漉き和紙の手触りを実感。独特の柔らかさを出すために巻く



1 素材や道具についても丁寧に説明しながら手仕事を披露  
2 膠は1年中温められている 3 伊予の和紙を巻いた状態  
4 忠彦氏による女雛の腕折り 5 桂甫氏による五人囃子の着付け



2Fには、昔ながらのひな人形から現代的なものまで展示。雛に囲まれて、ゆったりと過ごす見学者



1 紙と裂地の裁断。紙は伊予の古い手漉き和紙を使用  
 2 裂地のほつれを防ぐ処理にもひと手間かける  
 3 裳袴の絵入れ。「下仕事でしっかり作っておくこと。それによっていいものができる」



「この仕事に入って54年ですが、“一生研究”という初代の言葉どおりまだまだ発見の日々」と話す二代弼峰・大橋祥男社長。手にしているのは同社に伝わる寸法帳



京雛の伝統を今に受け継ぐ  
 平成22年秋の叙勲瑞宝単光章受章

# (株)大橋弼峰

有職雛人形を始め、京人形の伝統美を今日に受け継ぐ(株)大橋弼峰(上京区)。職人の技の粹を集めて完成する京人形の製作工程について、さまざまな実演を交えて解説。熟練の手作業により生み出されていく京人形の美に、見学者の視線が集まった。





専門の職人の技の結集により京人形の伝統が受け継がれる。工房2Fでは手足師の澤野正氏、頭師の川瀬健山氏、小道具師の工藤史桜氏、髪付師の井上正幸氏の実演が行われた



匠の技を披露。質疑応答も和やかに



「胸の角度を削るのも、襟を巻くのも真剣勝負」



1Fでは大橋社長が着せ付け・振り付けを実演。接着には膠（にかわ）を使用。膠は薄くつけて修復もできる



女雛に続いて男雛も製作。大橋社長の腕折りの技に、工房内の空気が張りつめる

東山山麓より流れる一筋の水の如く、京甲冑の技を伝える

平安住一水

# 京都甲冑(株)

京都甲冑(株) (山科区) では、同社に伝わる京甲冑づくりの技と伝統を、各工程の実演とともに紹介。鍛金や塗箔、威しほか、さまざまな部品の製作、組み上げなど、多岐にわたる工程の様子を見学者は熱心に見つめ、京甲冑づくりの世界を体感した。



一枚の鉄板からさまざまな工程を経て製作される京甲冑づくり。質疑応答も現場ならではの内容の濃いものに



工房1Fでは切り出しから塗箔まで生地  
の製作、2Fでは各パーツの製作や組み  
上げ、威しなどの工程が行われている



「工場の皆で作っても一人で作っても同じように、高い品質に仕上げることが大切。最後の一呼吸というのは、技術だけではない、やはり感性ですな」と  
四代平安住一水、今村達人社長



◀使用年数は100年以上という木の台。台上の大小の窪みを用いて凹凸面を生み出していく



鍛金の工程。切り出した鉄板を金槌で成形。小札や兜の鉢、すね当て、面頬まで複雑な形状をつくり出す



塗り固めた生地に、金箔を押す（塗箔）



小札生地の穴あけ。正確な位置に開けないと、美しい威し、仕上がりは生まれない



▲▶ さまざまな部品を丁寧に仕上げ、取り付けていく  
◀威し。穴に糸を通し、綴じていく

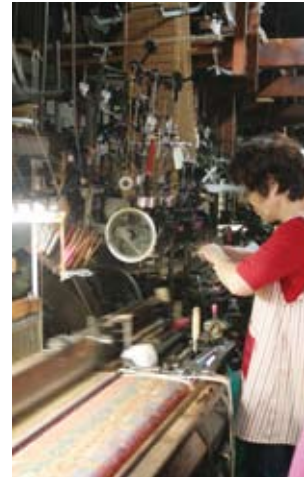




ジャガード織機は、パンチカード（紋紙）を用いて制御を行った初めての機械で、19世紀の計算機や集計器に応用された、コンピューターの歴史上重要な発明



三代目である山崎清一郎社長のご令嬢・徳子さん（右）と社員の西山昌志氏



初めて目にした光景に、熱心にいつまでも見入り、質問があとを絶えない



杼（ひ）に入れる緯糸。西陣では「ぬき巻」と呼ばれるもの



西陣地域でも数少ない、自社工場を持つ  
やまざき  
**岱崎織物(株)**  
岱崎織物（上京区）は、自社工場による製織しており多品種、小ロットでの細やかな対応が可能。また、他業種との積極的な交流により、織の新たな可能性を追求している。  
見学者は初めて見る紋紙を使用した織機の動きにいつまでも見入っていた。



紋紙は、約32×5cmのサイズの厚紙が紐によって連ねられており、穴は織機がどの糸を通すかということを示している

京町屋（西陣織屋建）を生かした染織工芸のミュージアム

# 織成館

織成館（上京区）は、手織を中心とする伝統文化の振興を目的に設立。(財)手織技術振興財団の運営する、染織及び工芸文化の展示館。全国の手織物や復原の能装束、時代衣裳の鑑賞から、工場見学、手織体験などが楽しめる。見学者は手のかかった繊細で豪華な織物に魅了された。

帯地製造業「渡文」の初代当主渡邊文七氏の「店舗兼居宅」として建築。伝統的な「織屋建」の特徴をそのまま残している



「渡文」の工場長からさまざまな話を聞く



▶工場2Fの隣室には、織り上がったばかりの西陣の帯を展示。さらびやかで美しい染織の技が堪能できる



◀方眼のマス目をうめて図案を描いた意匠紙



▼設計図通りに紋様を織っていく



1Fには復原の能装束を展示

